

《ウズベキスタン要人との邂逅》

2022年9月21日、東京千代田区のホテルニューオータニの芙蓉の間にてウズベキスタン共和国独立31周年記念レセプションが開催された。弊社（アセアン・フィナンシャル・ホールディングス）はウズベキスタン大使館より招待を受け、会長の西川が同レセプションに参加し、アブドゥラフモノフ駐日ウズベキスタン大使及び来日中のアジズ・アブドゥハキモフ・ウズベキスタン副首相兼観光・文化遺産大臣と相次いで会談した。

アブドゥラフモノフ駐日大使は小樽商科大学と北海道大学で、アブドゥハキモフ副首相は一橋大学で、それぞれ留学経験をお持ちである。お二人ともに日本に対する造詣が深く、日本がウズベキスタンの経済的発展に必要なパートナーであるという認識のもと、人材交流を飛躍的に活性化させたいとお考えのようである。



弊社会長西川とアジズ・アブドゥハキモフ副首相の会談の様子



弊社会長西川とアブドゥラフモノフ駐日ウズベキスタン大使の会談の様子

《ウズベキスタンの問題・日本への期待》

ウズベキスタンの海外移住者からの送金額は68億ドル、GDPの11%（世界銀行、2020年）に相当しており、重要な外貨獲得手段になっている。ただ、その移住先はロシアやウクライナのウェイトが高く、ロシア経済の動向が移住者数の増減に大きく影響すると考えられる。ロシアはウクライナ侵攻によって欧米諸国から厳しい経済制裁を課されており、経済の低迷は避けられない状況だ。ロシア及びウクライナへの移住者は減少するリスクに晒されており、移住者が減少すれば送金額の減少や失業者の増加によってウズベキスタン経済はダメージを受けるだろう。しかも、ロシア経済と西側諸国との経済関係の分断は長期化するリスクを抱えており、ウズベキスタンとしては早急に移住者の受け入れ先を開拓する必要があると考えられる。この問題の解決を期待されているのが日本なのだろう。労働人口減少に対応するために特定技能実習制度を設け、移住者の受け入れを積極的に進める日本に、ウズベキスタンは国を挙げて大いに期待していると考えられよう。

図表1 ウズベキスタンの移住先一覧上位10ヶ国

国名	人数(千人)	シェア(%)
ロシア	1,148	55.4
カザフスタン	304	14.7
ウクライナ	232	11.2
トルクメニスタン	84	4.1
アメリカ	63	3.0
ドイツ	42	2.0
トルコ	36	1.7
韓国	26	1.2
イスラエル	23	1.1
アゼルバイジャン	17	0.8

出所 世界銀行資料(2018年)をもとに当社作成

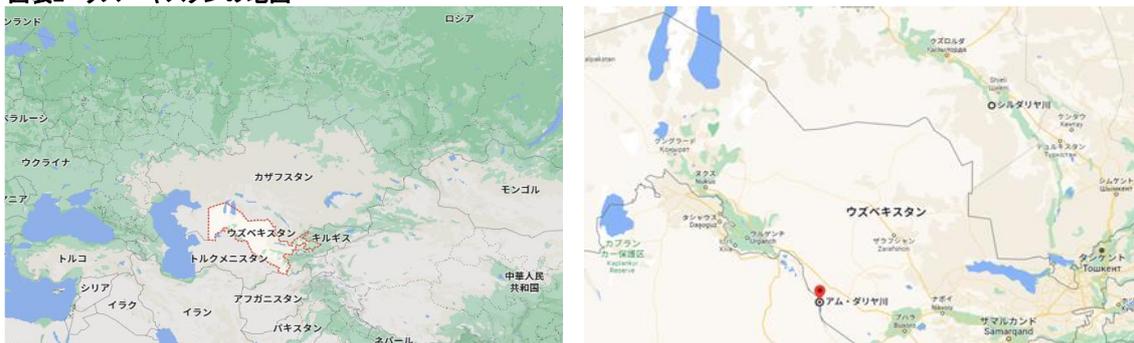
《ウズベキスタンという国》

ウズベキスタン共和国は1991年のソビエト連邦崩壊直後に独立した国家だ。人口3,440万人、国土面積44万平方キロメートル、2021年の一人当たりGDPは2,002ドル（名目ドルベース、IMF）となっている。ソビエト連邦の民族自決という方針の下でウズベク人居住区を中心に成立したウズベク・ソビエト社会主義共和国がその前身で、西側の国境線がカッターで切ったようになったのはそういう事情があるようだ。この結果、ウズベキスタンは世界に2つしかない二重内陸国（2つ以上の国を経ないと海に出られない国）となった。

帝政ロシアの支配下に入ったのは19世紀。当時ロシアは、南下政策を阻もうとするイギリスと激しく対立していた。中央アジアを支配下に置くことによってイギリス領インドを牽制する目的があったのだろう。

シルクロード全盛の時代、現ウズベキスタンの領域はアムダリヤ川とシルダリヤ川に挟まれた肥沃な土地であり、中央アジアの中心だった。ウズベキスタン第2の都市サマルカンドはシルクロード屈指の交易都市であり、マケドニアの英雄アレキサンダー大王（紀元前356～323）、唐の高僧玄奘（602～664）も訪れている。なお、アレキサンダー大王は当地で絶世の美女ロクサネを王妃として娶っている。

図表2 ウズベキスタンの地図



出所 ゲーグル

《ウズベキスタンの人々》

ウズベキスタンの民族構成はウズベク人（84.3%、イラン系とモンゴル系の混血）、タジク人（4.8%、イラン系）、カザフ人（2.4%、モンゴル系）、カラカルパク系（2.2%、モンゴル系）、ロシア人（2.1%）などとなっている。この他、ソビエト連邦時代に極東から強制移住させられた朝鮮人が比較的まとまって住んでいる。

8世紀頃にアラブ人によってイスラム教の布教が始まって以来、中央アジアではイスラム教が広く信仰されている。ウズベキスタン国民のほとんどがイスラム教徒だが、ウズベキスタンが世俗国家であること、ソビエト連邦が宗教活動に対して強い圧力をかけたことなどにより戒律による行動制限は緩やかなようだ。酒類の販売制限も厳格ではなく、ラマダンの簡略化もみられる。女性のファッションに対する制限も厳しくないようだ。また、交易都市国家群として繁栄した歴史によって他の宗教や文化に対する受容力は大きいようだ。イスラエルにも多くの国民が移住していることはその証左と考えられよう（図表1参照）。

教育水準は高い。調査機関が示す義務教育の就学率は 95%を超えている。人口密度が低く、遊牧民が多いという教育普及が困難な環境だが、ソビエト連邦が教育の普及を強力に推進した結果と考えられる。なお、共和国に移行してからは教育予算が削減された時期があり、教育水準の低下が危惧されている。

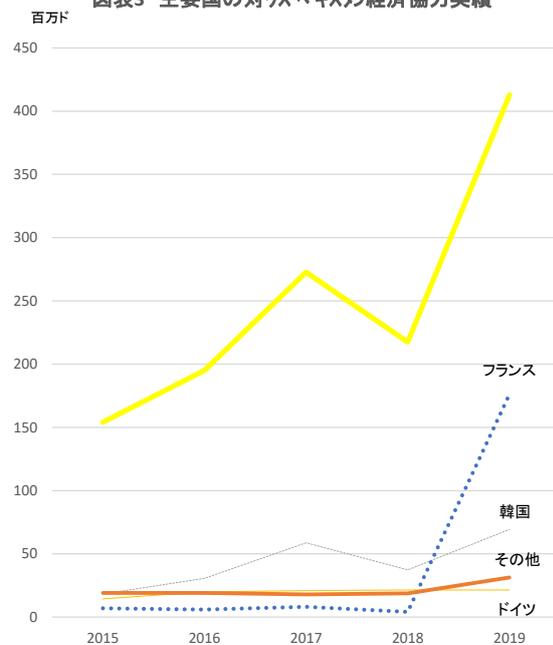
《日本に対する想い》

ウズベキスタン国民は日本を好意的にとらえているようだ。アジアの小国だった日本が日露戦争（1904年2月～1905年9月）で帝政ロシアに勝利したこと、壊滅的な敗戦から短期間に国の経済力を欧米諸国に勝る水準に引き上げたことに対して漠然とした憧憬の念をもっているようだ。ウズベク人を率いて短期間に世界の大国を作り上げた国家の英雄ティムール（1336～1405年）に重ね合わせているのかもしれない。

タシュケントにあるナヴォイ劇場には、その建設に携わった旧日本軍兵士（シベリア抑留者の一部 450名ほどが同劇場建設に転用された）を讃えるプレートが設置されている。前大統領イسلام・カリモフが作らせたものだ。前大統領自身も母親と一緒に整然と作業をする旧日本軍兵士をみており、その様子を見ながら母から勤勉に働くことの尊さを教えられたと語っている。苦境にありながらも与えられた使命に真摯に取り組む姿勢が当時のウズベキスタン人の記憶に残ったのであろう。また、食物の差し入れに対して旧日本軍兵士が手作りのおもちゃをお返ししたという逸話もあり、その礼節の心得に感銘を受けたウズベキスタン人も多くいたのだろう。前大統領はこのプレートを作成する際に「日本人捕虜とは絶対に書くな、彼らは恩人だ」と語ったそうである。

日本はウズベキスタンに対する ODA（政府開発援助）の支出額で長年にわたってトップとなっている。ウズベキスタンは社会主義体制から市場経済に移行するにあたって、これまで手厚かった教育支出を削減・抑制するといった歪が生じている。また、これまでソビエト連邦体制下では相互融通や共同利用ができた水源や電力を自前で用意しなければならなくなっており、発電所やダム建設・運用で資金や技術のサポートが必要になっている。こういった分野での協力を惜しまない日本に対して、ウズベキスタン政府および国民の評価は高い。自国の利害と直結した援助が多い中であって、支援国の立場に立った援助はウズベキスタンと日本の結び付きを強めているようだ。

図表3 主要国の対ウズベキスタン経済協力実績



出所 OECD/DAC、外務省国際協力局

《ウズベキスタンの雇用創出力》

ウズベキスタンの産業はソビエト連邦の産業政策の強い指導の下で形成された。天然資源採掘（鉱業）と綿花栽培（農業）が中核産業に位置付けられ、これら以外の物資は他のソビエト連邦傘下の国々から調達することとなった。

ソビエト連邦が崩壊すると、生活に必要な物資の多くが自国内で生産されていなかったため、ウズベキスタンは物資不足により驚異的なインフレに見舞われた。物資調達先の多様化や自国の生産能力増強により問題解消を図っているが、供給力不足によるインフレ圧力は解決されず、産業育成による新規雇用の創出も十分ではないようだ。鉱業は独立以降に天然ガス、石油、金、ウランの採掘量が増加しているが、十分な雇用増加に繋がっていないようだ。

二重内陸国であることも大きなハンディキャップになっている。輸送コストが高くなってしまい、国際競争力が劣ってしまうためだ。これは製造業でも同じことである。今後も短時間で雇用吸収力の大きい産業を育成するのは難しい。農業の近代化、サービス産業の育成や観光資源の開発などが急がれることになるだろう。こういった分野では日本から学べることも多いといえるだろう。

《我々アセアン・フィナンシャル・ホールディングスのお役に立てること》

我々は協同組合「善美」(<https://www.zenbicoop.com>)を通して、ウズベキスタンはもちろん、既に10以上の国々（インド、バングラディッシュ、スリランカ、ネパール、ミャンマー、インドネシア、カンボジア、ラオス、ベトナム、モンゴル、タイ、フィリピン、中国など）で、22の送り出し機関と提携し、近い将来必要となる人材調達先の多様化のお手伝いをしております。

ウズベキスタンは親日・知日の政権上層部のリーダーシップのもと、日本の雇用吸収力に期待しつつ、中長期的な視点に立ってウズベキスタンの雇用状況改善を進めていこうとしているようです。その際にはウズベキスタン国民の日本に対する憧憬も新しい関係構築にプラスになると思われます。ナヴォイ劇場の逸話から慮ると建設業に対する好感度が高いかもしれません。高い教育水準や、交易で栄えたという歴史に裏打ちされた異文化に対する受容力、コミュニケーション能力も魅了です。

今後も引き続き、送り出し国の情報収集に努め、国際情勢や経済状況を視野に入れた情報提供により、中長期的なお客様の人材調達戦略の最適化に貢献して参りたいと考えております。是非、一度お時間を頂戴してご面談を賜りますようお願い申し上げます。